

一月に入ってからすぐ、Tという有名な建設会社に勤めている友人から、子供の仕事を紹介するからよこしてみようにとお話が来ました。彼は、工大の建築科を出ていました。

お話は、前料のあるにもかかわらず、口をきいてくださった友人のお顔で、すぐにT工務店に入社することが出来ました。当時、その年、T工務店は、板橋区成増に、米軍の家族のためのハウスを建てておりました。

板橋区成増といいますが、東京から板橋街道を行ったところで、東上線になります。彼は、通勤に遠いからというので、成増に下宿することにしました。

食事付きというので、家では何の仕度も要りません。明日は仕事場の下宿にうつるという夕方、二人は猿橋の橋の方まで散歩に行きました。私たちは二十七年目にやっとならんで散歩をしました。

「お母さんのような人って、めずらしいね」

と、彼は途中の坂道を私の手をひいてくれながら申しました。

「どうめずらしいの？」

「つまりさ、僕とお母さんといま一人、人間がいて、三人が無人島にいるとするでしょう」

と、子供は、遠くから光って流れてくる桂川の水面をみつめながら、

「そして食物が一つしかなかったとしたら、僕はまず自分が食べて、それからお母さんに食べさせてそれからその人にあげる、ところなるでしょう」

「うむ、それでなあに？」

「お母さんはまず僕とその人に半分ずつくれて、もし残ったら自分が食べる人だもの」

「そうね、私はそうなるわ」

「だからめずらしい人だっているの」

「なぜ、めずらしいの？」

「それが分らないから、なおおもしろい人だと思う。お母さんの育った家って、どんな家だったの？」

「としよりが二人いて、私は一年中病気ばかりして、寝ていたわ」

「どうして、僕のお父さんと結婚したの？」

「それは昔だから、昔はよく分らない相手と人に決められて結婚したものよ。そしてそれを運命と思って、あきらめたのね」

「一人でいたら丈夫で暮らせた？」

「さあどうかしら。でも私は、あなたを産んでほんとうによかったと思っているの」

「子供ってそんなにいいものなの？」

「そうよ。世界一のものよ。ことに、一緒に生活の出来る子供なんて、まったく幸せそのものよ。私はあなたがいたから、今日まで生きてこられたと思うの。みんながいていた。いつ息を引きとつても、子供をどうする？ と耳許でいいさえすれば、地獄からでも生き帰ってきたって」

子供は、静かな横顔を見せて、だまっていました。

河原には雪を含んだ冷たい風が吹いていたが、二人はあたたかく手をにぎり合つて、世界は二人のもののような心持がしました。

次の日わずかな荷物をまとめて、子供は引越してゆきました。しばらく寂しかったのですが、土曜日になると帰ってきます。料理の下手な私は、それでも心を込めて、出来るだけのごちそうを心掛けるのでした。

二月、この年はさむい日が続きました。風邪をひいて起きられない日があつても、土曜日がくれば、子供が帰ってくると思うと、それがたのしみで何とか一人でがんばっていました。庭に白梅が一本あり、如月の寒風の中に、ささやかな花をつけました。